

# 袖ヶ浦市西新田遺跡

-一般県道長浦上総線地方特定道路整備事業(下根岸)埋蔵文化財調査報告書-



平成12年3月

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第382集として、一般県道長浦上総地方特定道路整備事業に伴って実施した袖ヶ浦市西新田遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古代の土器や中世陶磁器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 中村好成

## 本文目次

I	はじめに	2
1	調査の経緯と経過	2
2	調査の方法	2
3	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
II	検出した遺構と遺物	5
1	概要	5
2	遺構	5
3	遺物	8
III	まとめ	8

報告書抄録

## 挿図・図版目次

第1図	遺跡の遺跡と周辺の遺跡	3
第2図	調査区の位置と周辺地形・地形分類	6
第3図	基本土層	6
第4図	年度別調査範囲	7
第5図	平成11年度調査区検出遺構	9
第6図	平成11年度調査区出土遺物	9
図版1	平成9年度及び平成10年度調査内容	
図版2	平成11年度調査内容及び出土遺物	

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般県道長浦上総線地方特定道路整備事業（下根岸）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第1冊である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市戸国飛地字西新田368-8ほかに所在する西新田遺跡（遺跡コード229-023）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長 西山太郎（平成9年度）、沼澤 豊（平成10・11年度）、南部調査事務所長 高田 博の指導のもと、下記の職員が実施した。

発掘調査 平成9年9月16日～平成9年9月30日 副所長 野口行雄

平成10年9月7日～平成10年9月11日 技師 吉野健一

平成11年9月16日～平成11年9月30日 技師 城田義友

整理作業 平成11年11月1日～平成11年11月30日 主任技師 小笠原永隆

- 5 本書の編集・執筆は、主任技師 小笠原永隆が担当した。

- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、袖ヶ浦市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 國土地理院発行 1/25,000地形図「上総横田（NI-54-19-16-4）」

第2図 袖ヶ浦市役所発行 1/2,500都市計画図「No41(IX-ME 34-1)」「No42(IX-ME 34-2)」

- 8 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

# I はじめに

## 1 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、当地域の道路網整備を目的に、一般県道長浦上総線下根岸地区の整備事業を計画した。当該事業地内には埋蔵文化財が所在することから、その取扱いについて関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施する運びとなつた。

西新田遺跡については、平成9年度から平成11年度にわたって発掘調査が実施され、調査終了後に引き続き整理作業が行われた。平成9年度は、調査対象範囲920m<sup>2</sup>のうち24m<sup>2</sup>、平成10年度は、調査対象範囲230m<sup>2</sup>のうち23m<sup>2</sup>の上層確認調査をそれぞれ実施したが、遺構・遺物ともに検出されず、本調査には至らなかった。しかし、平成11年度に75m<sup>2</sup>の上層本調査を実施したところ、奈良・平安時代から中世にかけての溝状遺構が4条と土師器・須恵器及び中世陶磁器などが検出された。

## 2 調査の方法

各年度とも、道路整備部分のみの調査であるため、調査区はいずれも長細いものであった。従って、グリッド設定は困難であり、調査範囲の長軸方向に沿った形で任意のトレンチを設定した。そして、基準杭を利用して、国家座標系に基づく位置を確認した。また、トレンチの設定に際しては、調査区が交通量の多い現有道路に隣接することから、道路舗装部分から一定の幅を持たせるなど慎重を期した。なお、平成11年度調査区については、調査対象面積が100m<sup>2</sup>以下のために全面本調査としたが、平成9・10年度と同様、調査区の設定に際しては、現況を十分に考慮した。

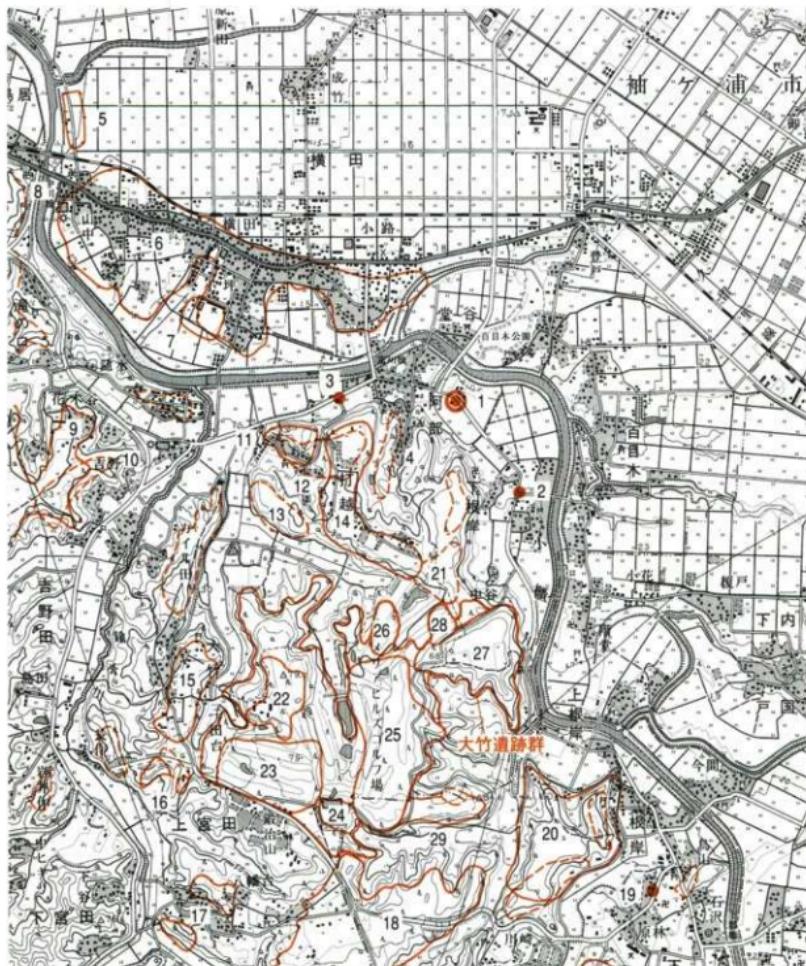
調査に際しては、各年度とも各地点の安全や、遺構・遺物の出土状況を考慮しながら、重機と人리를併用した。

## 3 遺跡の位置と周辺の遺跡（第1図）

西新田遺跡は、袖ヶ浦市戸国飛地字西新田368-8ほかに所在する。小櫃川中流域左岸に位置し、東京湾から約7.5km離れた地点にある。付近は、蛇行する小櫃川によって開析され、右岸側には広い氾濫平野が形成され、水田として利用されている。これに対して左岸側は、隣接するようにして丘陵地が広がる。丘陵地は、小櫃川に注ぐ幾多もの支谷によって樹枝状に開析され、急峻で複雑な地形を呈している。

調査区は、小櫃川と標高47mほどの丘陵地に挟まれた低地上にあり、地形的には平成9年度調査区西側部分が旧河道、平成9年度調査区東側と平成10年度調査区が低位段丘面、平成11年度調査区が下位河岸段丘面にそれぞれ相当する。調査区の標高は、平成9年度及び10年度調査区が14m～15m、平成11年度調査区が16mほどであり、小櫃川との比高差は2m～4mとなっている。

本遺跡周辺では、5kmほど下流にある菅生遺跡<sup>1)</sup>を除き、長らく発掘調査は行われていなかった。しかし、数多くの古墳群が存在する地域として注目されてきた<sup>2)</sup>。さらに、近年の開発の波は当地域にも及ぶようになり、それに伴い調査例も増加し、遺跡の状況も明確なものとなりつつある。特に、本遺跡の南側台地上はゴルフ場開発に伴って、「大竹遺跡群」として昭和61年度から平成2年度にわたり、財団法人



第1図 遺跡の遺跡と周辺の遺跡

- |           |               |                   |          |
|-----------|---------------|-------------------|----------|
| 1 西新田遺跡   | 10 滝ノ口向台古墳群   | 19 山王台遺跡          | 27 内出原遺跡 |
| 2 横岸根遺跡   | 11 打越城跡       | 20 上根岸館跡          | 28 尾煙台遺跡 |
| 3 重常遺跡    | 12 北上原古墳群     | 21 下根岸古墳群         | 29 狐谷遺跡  |
| 4 阿部堂谷古墳群 | 13 平ヶ作古墳群     | 22~29 大竹遺跡群・大竹古墳群 |          |
| 5 北口城跡    | 14 打越台遺跡      | 22                |          |
| 6 横田郷中心地点 | 15 大竹若跡       | 23 三ツ田台遺跡         |          |
| 7 小坪館跡    | 16 嘉登遺跡・嘉登古墳群 | 24 上原南遺跡          |          |
| 8 桢古墳群    | 17 上宮田城山遺跡    | 25 向神納里遺跡         |          |
| 9 滝ノ口向台遺跡 | 18 林道路        | 26 二又堀道路          |          |

君津都市文化財センターによって台地全面にわたる大規模な調査が行われ、各時代にまたがる数多くの遺構・遺物が検出され、周辺地域史の解明に貴重な資料を提供している<sup>1)</sup>。

以下、近年の成果に基づいて、時代別に周辺遺跡を概観することとする。

旧石器時代については、発掘調査例自体がいまだに少なく、その様相を的確に述べることは困難である。わずかに滝ノ口向台遺跡<sup>2)</sup>(9)及び林遺跡<sup>3)</sup>(18)から、IX層からX層及びVI層の小規模なブロックがそれぞれ検出されている程度である。しかし、頁岩などの原産地に近い場所である上、近隣地域からは比較的大規模な検出例もあることから、本遺跡周辺の台地上にも、包含地がある可能性は十分にある。

縄文時代の遺跡は、本遺跡南側の台地上に展開する大竹遺跡群をはじめとして、点在する状況が窺える。前期以前では、大竹遺跡群内の二又堀遺跡(26)から草創期の石器、向神納里遺跡(25)から、早期から前期にかけての礫群や堅穴住居跡、炉穴、陥穴が検出されている。中期は滝ノ口向台遺跡(9)や嘉登遺跡(16)<sup>4)</sup>で、後期は嘉登遺跡や大竹遺跡群内の笊田遺跡(22)などで集落跡が検出されている。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、大竹遺跡群内で大規模な集落や方形周溝墓群・古墳群が検出されている。特に向神納里遺跡における須和田式期の方形周溝墓と、笊田遺跡における須和田式期集落跡の検出は注目される。また、滝ノ口向台遺跡でも宮ノ台式期の方形周溝墓が検出されている。このほか、大竹遺跡群内の三ツ田台遺跡(23)で古墳時代前期から後期の集落跡が検出されている。なお、本遺跡から5kmほど下流の小櫃川自然堤防上の芝野遺跡<sup>5)</sup>や菅生遺跡では、弥生時代後期から続く水田跡も検出されている。古墳群についても周辺地域は小櫃川流域の中で比較的密に分布し、前方後円墳や前方後方墳を1基～2基含む古墳群が多い。その中には、本遺跡に隣接する阿部堂谷古墳群(4)、出現期古墳や50m級の前方後方墳を含む滝ノ口向台古墳群(10)、40m～50m級の前方後円墳を含む平ヶ作古墳群(13)や北上原古墳群(12)などがある。

奈良・平安時代では、方形周溝状遺構と石櫃・火葬墓が三ツ田台遺跡、嘉登遺跡及び林遺跡で検出されている。また、笊田遺跡で墨書「千万」のある骨蔵器、平ヶ作古墳群で骨蔵器転用の綠釉手付瓶が出土している。集落については、小櫃川の河岸段丘上の山王台遺跡で検出されている。

中世には畦蒜莊に属し、応永年間の検田帳により、莊内の横田郷の存在が知られる<sup>6)</sup>。今回の調査区が含まれる大字阿部の地名も、応永18年の検田帳に見られることから、本遺跡は畦蒜莊横田郷に含まれるものと考えられる。戦国期には、上総武田氏(真里谷氏)の実質的な支配下におかれたと考えられるが、周辺には打越砦跡をはじめとして、関連する数多くの城館跡が存在する<sup>7)</sup>。これらに関係する遺跡として、本遺跡の西側に隣接する重常遺跡<sup>8)</sup>(13)の調査が行われている。

注1 大場磐雄 1948「千葉県木更津市菅生遺跡の研究」「上代文化 第18輯」

大場磐雄ほか 1973「上総菅生遺跡－昭和47年度第1期調査速報」木更津市教育委員会

乙益重隆ほか 1978「木更津市菅生第2遺跡」君津都市広域事務組合広域水道局菅生遺跡調査会

乙益重隆ほか 1980「上総菅生遺跡」木更津市教育委員会

城田義友 1998「第2章 菅生遺跡」「一般国道409号(木更津工区)埋蔵文化財調査報告書」(千葉県文化財センター)

2 千葉県教育庁文化課 1990「千葉県所在古墳群詳細分布調査報告書」

3 稲葉昭智ほか 1991「笊田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)－大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書－」(君津都市文化財センター)

- 稻葉昭智ほか 1993「大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－二又堀遺跡・大竹古墳群－」(財)君津都市文化財センター
- 稻葉昭智ほか 1994「大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－尾烟台遺跡・内出原遺跡・大竹古墳群・下根岸古墳群－」(財)君津都市文化財センター
- 稻葉昭智ほか 1995「大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群－」(財)君津都市文化財センター
- 4 小高春雄ほか 1993「竜ノ口向台遺跡・大作古墳群」(財)千葉県文化財センター
- 5 井口 崇ほか 1987「林遺跡」(財)君津都市文化財センター
- 能勢秀喜 1994「林遺跡Ⅱ」(財)君津都市文化財センター
- 6 西原崇浩 1994「嘉登遺跡・大竹長作古墳群」(財)君津都市文化財センター
- 7 神野 信ほか 1992「木更津市芝野遺跡における水田跡について」「研究連絡誌」第34号 (財)千葉県文化財センター
- 8 柴田龍司 1993「小櫃川流域における中世遺跡の変遷」「研究連絡誌」第37号 (財)千葉県文化財センター
- 菅生 衛 1998「村の生活(上総郡畦蒜莊横田郷を舞台に)」「千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料」千葉県
- 9 千葉県教育庁文化課 1996「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房地域－」
- 10 糸原 清 1999「袖ヶ浦市重常遺跡」(財)千葉県文化財センター

## II 検出した遺構と遺物

### 1 概要 (第2~4図、図版1)

先にも述べたが、平成9年度及び10年度調査区からは遺構、遺物とともに検出されなかった(第4図)。これらの調査区の土層を観察したところ、砂層がラミナ状に堆積しており、小櫃川による河川堆積物であることが確認された(第3図・図版1)。第2図に示した地形分類を見てもわかるように、平成9年度西側調査区は旧河川流路内にある。また、平成9年度東側調査区及び平成10年度調査区は、氾濫平野内に位置している。平成11年度調査区は、これらの調査区に比して、1mほど高い微高地に位置し、下位段丘面に相当する。この調査区から古墳時代以降の遺構と遺物が出していることから、土地の利用状況は現在とさほど変わらず、微高地に集落や畑地を形成し、低地部分は何度も小櫃川の氾濫を受けながらも、水田として利用されていた状況が考えられる。

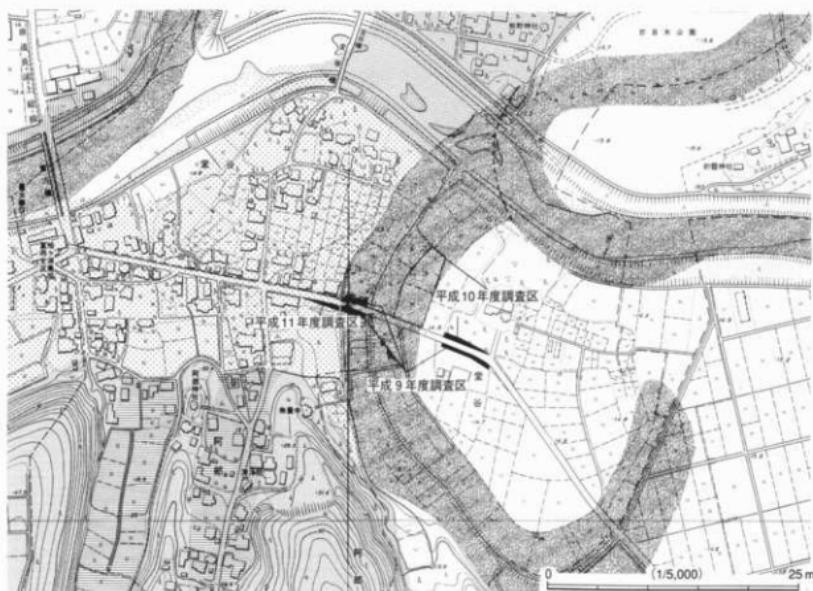
### 2 遺構 (第5図、図版2)

平成11年度調査区より、溝状遺構を4条検出した。いずれも中世以降の所産と考えられるが、明確に伴う遺物は確認できなかった。また、地形等を考慮すると、畑地などの地割溝である可能性が高い。

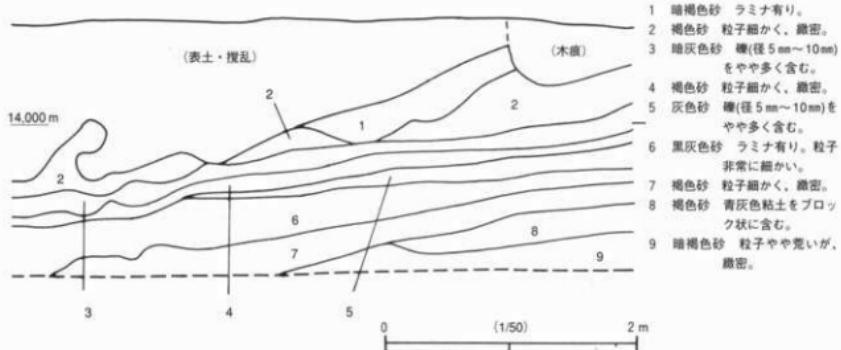
001a・b 調査区の西端近くより検出した。幅180cmほどの001aと幅80cmほどの001bが隣接する形で検出された。底面は平坦であり、深さはいずれも確認面から20cmほどである。

002 調査区の中央部付近より検出した。幅は約180cm、深さは確認面から約20cmである。底面は平坦であり、両脇は緩やかに立ち上がっている。

003 調査区の東端付近より検出した。幅は250cmほどと考えらるが、東側の立ち上がりは現場状況から調査できず、推定とならざるを得なかった。溝は2段にわたって構築され、西側120cm~140cm部分は

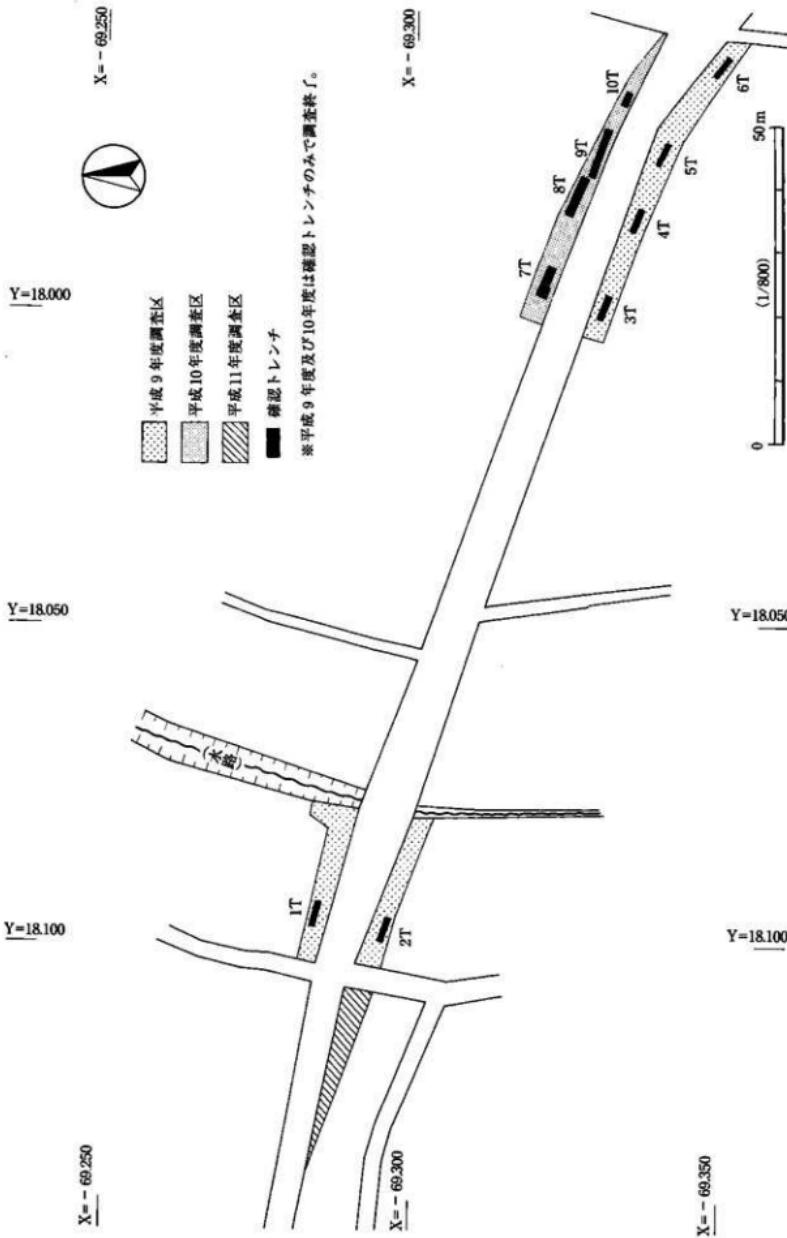


第2図 調査区の位置と周辺地形・地形分類  
※地形分類は国土地理院1971年発行「1/25,000 土地条件図 姶崎」に準拠した。



第3図 基本土層(7丁北壁)

第4図 年度別調査範囲



深さ約20cm、それより東側は深さ約50cmを測る。他の溝状遺構と違つて段を有し、すぐ東側が旧河川流路になることから、段整形を行つた痕跡とも考えられる。

### 3 遺物（第6図、図版2）

表土及び遺構覆土中より、古墳時代後期から奈良・平安時代の土師器を207点(399.7g)、須恵器を11点(161.1g)、中世陶器(鉄軸擂鉢)を3点(11.9g)、中世船載磁器(青磁)2点(10.8g)、近世陶磁器を6点(6.7g)それぞれ検出した。しかし、その大半が細片であり、図示可能なものは9点のみであった。なお、石類も800.4gほど確認されたが、全てが川原石であり、人為的な加工等の痕跡が見られるものはなかつた。

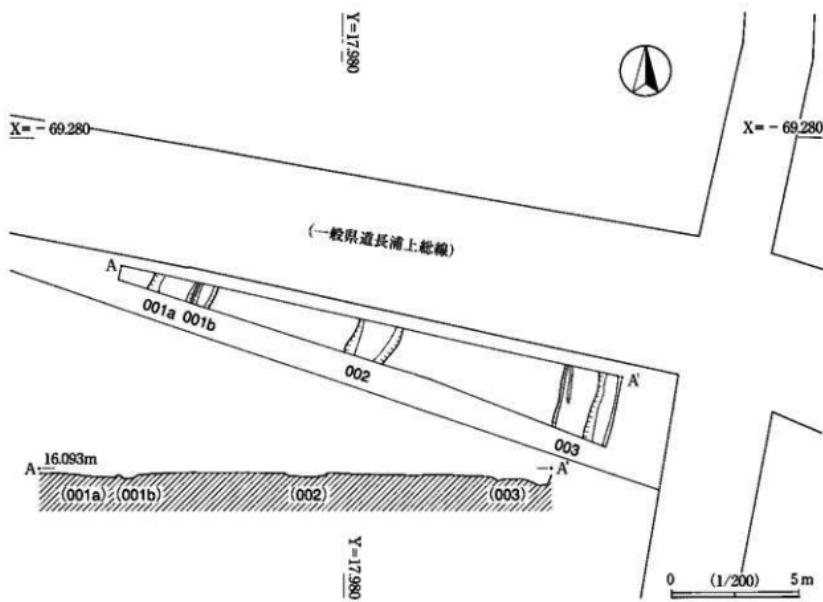
1は土師器壊である。残存は1/8ほどであり、推定口径は14.6cmを測る。上方に大きく開く器形を呈し、口縁部付近はつまみ上げられるように立ち上がる。全体に水流等で摩耗しており、整形は不明である。色調は外面が褐色～黄灰褐色、内面が褐色を呈する。8世紀代の所産と考えられる。2は須恵器高台付壊である。底部付近のみ1/8ほどの残存で、推定底径は10.0cmを測る。高台部は貼りつけされ、色調は灰色を呈する。8世紀代の所産と考えられる。3・4は古墳時代後期の須恵器大形甕である。3は底部の破片で、外面にはヘラケズリによる整形痕が観察される。4は口縁部破片で、自然釉が付着している。自然釉付着部以外の色調は、いずれも青灰色を呈する。5は須恵器裏の胴部破片である。色調が暗灰褐色を呈するいわゆる在地産のもので、タタキによる整形痕が観察される。6は古墳時代後期の須恵器提瓶胴部破片である。外面にはカキ目、内面にはタタキによる整形時の當て具痕が観察される。7・8は船載青磁碗の口縁部破片である。7は龍泉窯系青磁碗であり、いわゆる太宰府編年<sup>11</sup>のI-4類に相当する。12世紀中葉から13世紀初頭の所産と考えられる。釉はオリーブ灰色を呈する。8は龍泉窯系青磁縞蓮弁文碗であり、I-5b類に相当する。13世紀中葉から後半の所産と考えられる。釉は淡いオリーブ灰色を呈する。9は瀬戸・美濃産鉄軸擂鉢の口縁部破片である。大窯I期に相当し、15世紀末葉の所産と考えられる。器表面は荒れており、施釉部分の剥落が激しい。

注1 横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』第4号

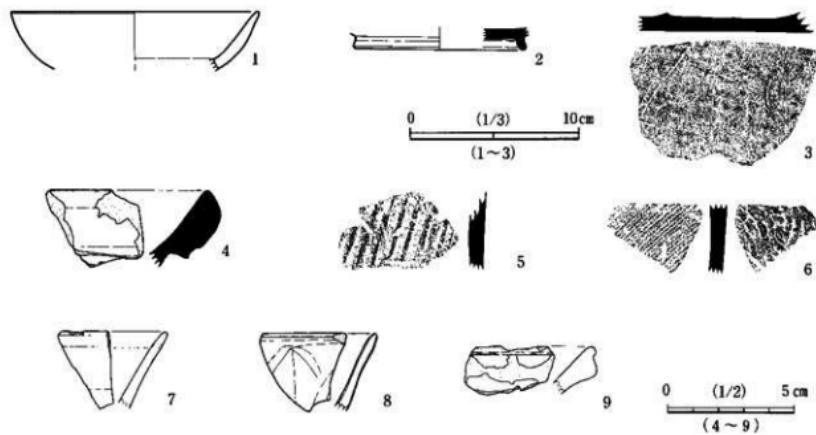
## III まとめ

今回の調査では、平成11年度調査区のみから溝状遺構4条と少量の遺物を検出したに過ぎない。道路整備部分という極めて限られた調査範囲であったため、遺跡の全容を解明することは極めて困難である。しかし、遺構・遺物とともに検出されなかつた平成9・10年度調査区と併せて考えると、小櫃川沿いの微高地に集落や畠地が形成されていた様子が看取することができる。この状況は、遺物の確認できる古墳時代後期以降から始まり、現在の字堂谷及び字阿部における土地利用に連続している(第2図)。平成11年度調査区は、畠地として利用されていた痕跡のみの検出であるが、推察される状況から、南側部分に当時の集落があり、今回出土した遺物もそこから移動してきた結果のものと考えられる。

検出された遺物は、まず古墳時代後期の土師器・須恵器が認められる。本遺跡の北西20mほどの所に



第5図 平成11年度調査区検出遺構



第6図 平成11年度調査区出土遺物

は、前方後円墳 1 基、円墳 7 基からなる阿部堂谷古墳群があり、この古墳群に関わる集落及び生産活動の領域との関連性が考えられよう。さらに、8世紀代の遺物も認められることから、律令期に入ってからも引き続き、本遺跡周辺に村落が形成されていたと思われる。次に、中世の陶磁器類が出土しているが、I-2においても触れたように、横田郷阿部に関連する遺物と考えられ、興味深いものである。

なお、本遺跡周辺は打越砦跡をはじめとして、篠子城や中尾城跡など戦国期の上総武田氏（真里谷氏）関連の城館跡等も多く見られる地域である。今後の周辺調査で、これらに関連する遺構及び遺物の検出も十分に考えられる。



調査区近景（平成9年度）



1 T（平成9年度）



3 T（平成9年度）



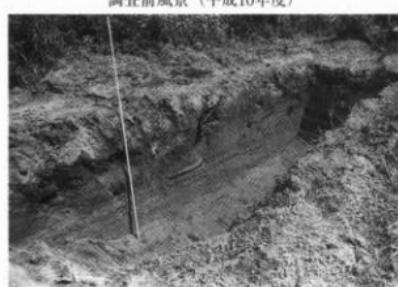
6 T（平成9年度）



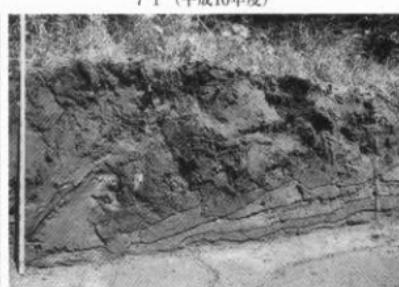
調査前風景（平成10年度）



7 T（平成10年度）

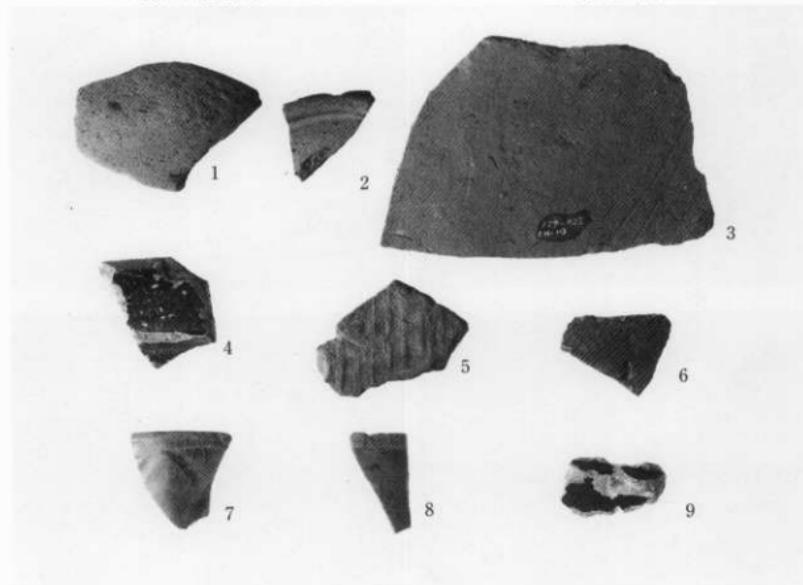


8 T（平成10年度）



7 T北壁断面（平成10年度）

図版2



出土遺物 (平成11年度)

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしにししんでんいせき
書名	袖ヶ浦市西新田遺跡
副書名	一般県道長浦上総線地方特定道路整備事業（下根岸）埋蔵文化財調査報告書
卷次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第382集
編著者名	小笠原永隆
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811
発行年月日	西暦 2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
にしんなん 西新田	ちばけん 千葉県 そでがうらしとくにとびち 袖ヶ浦市戸国飛地 あざににしんなん 字西新田368-8(ほか)	12229	023	35度 22分 30秒	140度 01分 50秒	19970916~ 19970930 19980907~ 19980911 19990916~ 19990930	24m <sup>2</sup> 23m <sup>2</sup> 75m <sup>2</sup>	一般県道長 浦上総線地 方特定道路 整備事業 (下根岸) に伴う埋蔵 文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西新田	包蔵地	古墳時代	なし	須恵器・土師器	阿部堂谷古墳群と中 世莊園「横田郷阿部」 に関連する遺跡の発 掘調査である。
		奈良・平安時代	なし	須恵器	
		中世	溝状遺構 4条	陶磁器(青磁碗・猪鉢)	

千葉県文化財センター調査報告第382集

袖ヶ浦市西新田遺跡

一般県道長浦上総線地方特定道路整備事業(下根岸)埋蔵文化財調査報告書

平成12年3月31日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 千葉県土木部  
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 正文社  
千葉市中央区都町2-5-5